

成果報告 1 「東洋学の歩いた道」シンポジウム（学習院大学史料館講座より）

ディスカッション

司会：鎌田 純子（学習院大学史料館助教）
斯波 義信（東洋文庫長）
村松 弘一（学習院大学学長付国際研究交流オフィス教授）
牧野 元紀（東洋文庫主幹研究員）
三宅 秀和（永青文庫学芸員）

司会 それでは、時間になりましたので、これから後半のディスカッションに入りたいと思います。

今回3館連携という展覧会を試み、私も先週非常に秋の気持ちいい時期に1日この3館をめぐってみました。3館をあわせ見ることによって意義深く今回の展覧会は成功しているなどという思いに改めて感動いたしました。

それがなぜかということなんですけれども、「東洋学の歩いた道」というタイトルどおり、マルコ・ポーロ以来の14世紀以来20世紀に至るまでの東洋学の発展を史跡と各展覧会が点と点で結んでいて、全部を見ることによって、まるでその大きな流れを捉えることができるような気がいたします。ですので、討論に先んじまして、各館展覧会の簡単なご紹介と本日のご講演の内容を簡単におさらいして、ディスカッションのたたき台にさせていただきたいと思います。

めぐる順番はそれぞれご自由だと思うのですが、私はまず東洋文庫から見てまいりました。東洋文庫の展覧会は14世紀のマルコ・ポーロを初めとする、その後の大航海時代を経て、20世紀に至る西洋人の視点で見た東

洋というもので、世界的規模の引いた視点です。大きく東洋への関心を捉えられる展覧会になっておりました。

つまり、先ほど東洋学というのは西洋で生まれた学問であるという牧野先生のお話通り、マルコ・ポーロを初め商人や宣教師、あるいは、探検家によるヨーロッパの人々の関心のもとに、東洋というものを概観できます。その後の19世紀以降、日本でいえば明治以降の東洋学の礎になる部分が見られると思います。

その後日本に話が移りまして、明治以降、1880年代にたくさんの西洋人のお雇い外国人が日本に来ます中の1人、リースという歴史研究者が西洋の方法論による歴史学を日本人に伝授したということが本日の斯波先生のご講演にあったかと思います。すなわち、それまで西洋人によって語られていた東洋が、東洋の1つである日本人によって語られるきっかけになります。そして、東洋学を語ろうという機運が日本にみなぎり、たくさんの学者が登場します。その中の1人が白鳥庫吉という人です。この方は明治23年に学習院の歴史の先生になりました。白鳥自身は帝国大

学では西洋史の研究をしていたんですけれども、三浦梧楼院長の命令で初めて「東洋諸国の歴史」という授業を担当し、これが日本で初めての東洋史の授業に当たるということが重要な点です。

これが学習院の展覧会の内容になります。つまり白鳥は多くの教材を収集し、その中には唐三彩ですとか、あるいは、これは推測なんですけど、先ほど村松先生のご発表にも出ておりました広開土王碑の拓本などがあります。これらは現在展示で公開しております。さらに、近衛篤磨院長のもとに中国からの留学生が来たり逆に学習院からも修学旅行先としてアジアに多くの学生たちが行きました。

こうした教育を受けた中の1人に細川護立がおりました。今度は永青文庫の展覧会に移ります。永青文庫の展覧会というのは、先ほどの東洋文庫の展覧会が非常に引いた視点、世界的規模の視点から見た東洋学の展示であるのに対し、クローズアップした、1人の人物を切り口に、深いところまで掘り下げる内容の展覧会になっております。学習院の卒業生でありました細川家16代当主細川護立という1人の人物の東洋、特に古美術品への強い関心のもとに収集された文物を展示しております。

ただし、気をつけなければいけないのは、学習院の教育によって細川護立が東洋学というものに関心を持ったのではなくて、もともと細川家の大名としての漢詩・漢文というものの素養がそこにはベースにあったのだということ、三宅先生の御講演の中で教えていただきました。

ここにもC.T.ルーという古美術商が細川護立に介在して、現在、国宝の細川ミラー、

銅鏡ですとか、唐三彩などを売っていたということがわかりました。

それで、考えますのが、細川護立自身、あとは、ちょっと話が戻りまして岩崎久彌もそうなんですけれども、経済的に潤沢で、日本のためにとか、あるいは、東洋学の発展のために、ぼんとモリソン文庫を約70億円で購入したり、あるいは、細川護立が今国宝になっている銅鏡を2,3分で即決して買うとか、そういった戦前の日本の機運が感じられます。自分のためだけではなくて、多くの学者のため、さらに、それを見た芸術家、例えば梅原龍三郎のような、新たな芸術が生まれる。そういうものを全て含めて東洋学の発展に至っているのだなという感想を持ちました。

余りうまくまとめられませんでしたけど、お話がふんだんにありましたので、こんなところがベースです。1つここで私からの質問ですが、東洋学の長い道のり、それこそマルコ・ポーロ以来の20世紀までの長い道のりを考えた場合、19世紀以降急に盛んな発展が見られますが、何ゆえにそういうことができたのか、時代背景について教えていただければと思います。村松先生。

村松 全体的に大きい話になってしまうかもしれないので難しいかもしれませんが、やはり今回の東洋学の話の中心になるのは、19世紀の終わりごろから20世紀の初めの時代、明治維新から大正期、昭和の初めくらいにかけての時期なんです。アヘン戦争以降ヨーロッパの勢力が中国から東アジアの国々に入ってきて、その後、清朝が崩壊に向かっていきます。1911年には辛亥革命がおり、近代へ向かっていく。

そういう時代背景の中で、私の報告やほか

の皆さんの報告でも扱っている今回の展覧会の文物はそのころに日本に入ってきます。清朝が崩壊することによって、非常に価値の高い美術品が日本に流入してきましたし、また、その後、中国の国内では軍閥政府があちこちにできて、多くの文物が接収され海外へと流れていきました。書籍なども同様な状況でした。そういった歴史的・政治的背景のなかで、日本やヨーロッパさらにアメリカへと文物・古籍が流出していったのです。

さらに、このような中国の文物を購入しようとする欧米の側の意識も高かった。例えばアメリカでもいろいろな文物がオークションに流れましたが、1910年代から20年代にかけてというのは、東洋の美術品のなかでも特に中国の文物が大量にオークションにかけられているんですね。それより前は日本のものが非常に多いんですね。やはり辛亥革命以降、1910年代から20年代、特に世界恐慌以前までは中国の文物がたくさんアメリカのオークションに流れていく。それをいろいろな人が購入するわけですね。莫大な財産を持って、文物を購入し、それを愛でる人々がたくさんいた。その文物は、例えばフランスのパリにあるギメ東洋美術館であるとか、米国のニューヨークのメトロポリタン美術館とかいろいろなところに寄付され、収蔵されるわけです。ギメやメトロポリタンに行くとき展示品の説明には必ず寄贈者の名前が書かれている。文物を受け入れる側の欧米諸国における中国の文物に対する意識の高さ、知識の豊富さ、購入する財力、アジアの美術品を収蔵する美術館の存在、美術品の寄付という行為に対する顕彰の意味づけなど、受け入れる側の時代・社会・文化背景の変化というのもある

と思います。

さらに、文物の流出と流入の間には骨董商というものが介在しています。骨董商は日本人だけとは限らないし、先ほどの私の報告にあったルーは中国人ですね。それが世界中いろいろな国々に美術品を売っていくんですね。日本にも世界を渡り歩いた山中商会という有名な骨董商がいるんですけども、大阪の商人ですね。彼らの世界展開の活動は、たとえば、ペンシルヴァニア大学の博物館のアーカイブズの山中商会の売り込みの手紙などを見るとよくわかります。その手紙の中にはルーから紹介を受けてここに来ましたみたいなことが書いてあるんですね。そういうグローバルな骨董商のネットワークもある。やはり、アジア的であるのですが、人と人とのネットワークがあったんですね。

今、東洋学というよりも、文物の流れという点を中心にお話しましたが、19世紀の終わりから20世紀の初めというのは、文物市場・骨董市場がグローバル市場・世界市場になっていく。そのころ、ちょうど日本では細川護立さんのような方が登場し、多くの文物を購入したということになるのかと思います。

そういったような、中国大陸・日本・欧米、それら全体を巻き込んだグローバル化の波という時代背景が東洋学の形成とも関係あるのかなと思います。ここでお話したのは文物のことを取り上げましたので、東洋学そのものではないですけど。

それ以外に如何でしょうか。

牧野 先ほどのご質問では、19世紀になってから急激に、というお話ですよ。マルコ・ポーロの時代からヨーロッパにおける東洋学の流れというのは連綿と続いているわけ

ですが、私の理解するところでは大きく2つあります。

1つは、マルコ・ポーロに代表される旅行家の記録や、先ほどの発表でもちょっと言及しましたが、宣教師などによる現地の布教記録が、ヨーロッパの知識人之間でずっと読み継がれています。そういう大きな流れがあります。そのなかでは、イエズス会の役割がとりわけ大きく、皆様聞いたことがおありかどうかわかりませんが、「シノワズリー（中国趣味）」が19世紀に入る直前、18世紀後半のヨーロッパの知識人・王侯貴族、あるいは、彼ら王侯貴族と対峙するような啓蒙思想家の間で非常にはやった時期があります。この流れは19世紀の近現代に入っても底流としてずっと存在し続けるわけです。とにかく、「アジアのことを知りたい、特に人文・社会の分野について知りたい」という、そういう方がヨーロッパには一定の数います。

もう1つは、それこそ19世紀という時代的背景が非常に大きく影を落とすわけですが、ヨーロッパの近代資本主義が成熟して、徐々にアジアにマーケットを求めてやってくる人々がふえてくるわけです。そこで発達する学問というのは、さきほど申し上げましたイエズス会的な部分、つまり、宗教的・教養的な部分とは別として、実学が非常に注目されます。具体的には、例えばインドやインドネシア、当時はイギリスやオランダが支配していたわけですが、そういった地域でとれる薬草になり得るような植物に関する分類図鑑などが編纂されたりとか、あるいは、東アジア・東南アジアに住んでいる人々の外観に着目したりして、今考えると変な話ですが、人種というものも存在して、ど

ういった民族がどこに住んでいるのかなどといった情報が重視されたことがあります。それはどうしてかという、現地で非常に集約的な資本主義的経営を目指す上でそういった情報が必要だからでして、可能な限りの現地記録を集めることが、結果として学問を発達させたという実学的側面が確認されます。

その2つが、特に後者のほうですけれども、顔を出してきたのが19世紀でして、東洋学の発達を非常に大きく促したというふうには理解しています。斯波先生、いかがでしょうか、そのあたりは。

斯波 牧野さんの説明で十分ですが、少し蛇足を付け足しましょう。ヨーロッパの東洋学は段階を追って成長してきました。初めにマルコ・ポーロなどによる東洋の実地見聞記があり、15,16世紀の大航海時代には、マカオやマラッカやゴアで集められた東洋情報があります。17,18世紀になるとジェスイット教団（イエズス会）、遅れてギリシア正教の宣教師団が北京に在住して、トップダウンの形ではありましたが、相当に詳しい知識の体系をつくり、これをバロック・シナ学といいます。18世紀の末になるとインド学やセム系の言語文化、日本でいえばオリент学が起り、19世紀にフランス、ドイツ、イギリス、オランダなどで学問として形をととのえました。つきにご質問に関わって政治的、社会的、思想史的背景を申しますと、バロック・シナ学は、啓蒙主義、絶対王政と時代が重なってしまっていて、好奇心から東洋の礼賛へとシフトし、その傍ら重商主義、植民地主義の要請から植民地官吏の実用知識を提供することに心が広がりました。この頃、東洋やその文化を知ったことから、逆に西洋の自意

識を改めて問い直す動きが起きました。インド学やセム系文化への興味は、ヨーロッパ語のルーツを探るというロマンティシズムに関わって生まれたものと思われまゝ。19世紀に近代的な東洋学が大学レベルで生まれたとき、言語学、文献学、歴史学がディシプリンの中心を占めたことや、東洋を西洋の対置物ないしは西洋を映し出す反射鏡と見る、すなわちオリエンタリズムを内蔵していたとも説かれるのは、こうした事情からでしょう。ただし19世紀の各大学で開設された東洋学では、東洋の現地を踏まずにその古典や古記録を読み解く文化主義的なエリート主義の側面と、現代口語を講じながら実用的な知識を究めるといった側面とが混ざっていました。20世紀になって激動する東洋に直面してから、社会の要請を受けて大学の教員ポストが一斉にふえ、分野を分けた専門家が輩出するようになりました。日本でも大正から昭和初期にかけて教員ポストがふえて、東洋学の専門家集団はこの頃にうまれてきたといえます。またその副産物ですが、絶えず専門が分化していく傾きが自然とできてきました。外野席から見たとき、東洋学は分かりづらいといわれる一因は、この辺にもあります。

司会 ありがとうございます。

牧野 非常に現実的な側面ですね（笑）。

司会 そうですね。20世紀以降、特に1910年代から30年代、特に文物が流れた背景には、清朝の崩壊を契機というのがありますし、さらに言えば、実学的な近代資本主義のマーケット市場として東洋が西洋から向かってこられたという部分。それとあともう1つ、牧野先生がおっしゃったのが、アジアのことを知りたいというずっと通底している知的的好奇

心があるということなんですけれども、私は細川護立公の話、ご自分で晩年にお書きになったお話の中で、小さいころに体が弱くて、たくさん探検記を読んだと。そういう流れの中で、東洋への探検というもの、中でも中国に興味があったんだというようなことが書いてあったように思います。

ここで三宅先生にお伺いしたいんですけれども、細川護立という人は16代の細川家当主でありますから、大名家の文物というものも当然細川家にはたくさんございまして、そういった中で東洋の文物、特にお墓から出てきたような明器とか集めていたというのが非常に斬新なことなのではないかなと。自分の家には十分たくさん茶道具やたくさんの大名道具がそろっているのに、プラス、東洋のものを新たに収集した。そこら辺の彼の意図とか思想とかについて教えていただければと思います。

三宅 指名のご質問、ありがとうございます。19世紀になぜ東洋学が進展したのか。そういう角度から答えてほしいという質問だと思いますが、3人の先生方それぞれ違う観点から19世紀になぜ東洋学が急激な進展を遂げたのかというんですけれども、まず1つには、世界が小さくなったからだろうというふうに思っています。そして、その影響で日本は開国をすることになった。そして、幾つかの混乱を経て、大名家という制度というか慣習というかがなくなった。それは華族という制度に変わってはいきますけれども、当時の人々は、これは源頼朝以来なのか、それとも、それ以前の院政期以来なのかはちょっとわかりませんが、大きな変化であるということは思ったはずで。細川家はそこで家の葬祭を仏

教から神道に変えます。つまり大名家というものが過去のものになるということ意識していたはずで。

そうはいつでも、大名家のものが非常によく残っていたのが細川家でした。そういうところで、道具を中国市場の混乱というか、国内体制が維持できなくなって流出するということになっていったときに、それを積極的に細川護立という人は受け入れていきました。それは財閥を主導するような立場の人たち、今の私立美術館をつくったような方々がお茶道具、大名家から流出したお道具を集めていったのとは違いました。それは唐三彩であったり、余り注目されてこなかった禅僧の書画であったり、近代の絵画、つまりコンテンポラリーな絵画であったわけですね。

そのとき思うのは、お墓から出てきたものということでは、用途というものを細川護立らは余り考えなかった。大名家の道具というのは基本使うものです。もちろんそうでない鑑賞する絵巻などもありますけれども、まず書画、これもお部屋を儀式のとき、あるいは、公式の使者が来たときに、そういうときに飾るものです。また、武器・武具、彼らは軍団の司令官ですので、平和な時代でもいつでも戦えるぞというのが建前でした。そして、その建前は大事でした。そのために用意はいつも調べています。旗指物も調べます。そういうふうに行ってきました。お茶道具も使うものですし、お能の道具も使うものです。こういう大名家の道具は鑑賞の対象になりますけれども、使うものでした。それが使わないものを収集することになりました。

つまり先ほど映したような銅器・銀器、それは日本の生活の中で何かの用途には基本な

らないものです。一部のものはお茶人・数寄者が自分の茶会で使うということはあったとしても、それは茶の湯の中で広がりを持たなかったわけです。それが細川護立だけでなく、横山大観の絵画、それも展示されているのを見るもの以上のものではないということになりますね。特に展覧会の場などは、使うというよりは鑑賞するものであって、それは何かの道具として使うものとはちょっと違うものです。

そういうようなことを先進的にしていた人だから、先ほどの明器、お墓の副葬品ですが、そういうものを集めていったときに、何かに使うとか、もともとの用途は何だったのかということに気にしない。ものとして美しい、見ていて喜びの気持ちがあふれてくるもの、じっくりと見ていて味わい深いもの、それが副葬品であった唐三彩であったり銅器であったり銀器であった。

質問に端的に答えるとこんな感じになります。

司会 ありがとうございます。つまり大名道具というのは基本的には使うものというのが大原則であると思うんですけども、鑑賞するという一種新たな感覚が20世紀以降芽生えて、そういった流れの中に細川護立の東洋の古美術品の収集というのがあると。

三宅 そうですね。それで、細川護立がこれも晩年語っていることなんですけれども、「ヨーロッパの人たちはお墓から出てきたかどうかを気にしない」と言っています。東洋の人たちはもともとの用途が気になってしまっていて、中国から出てきたものに最初には手をつけなかったらしい。少なくとも護立の語っている当時の意識ではそうであった。そして、

護立はヨーロッパの人々のように、来歴ではなくて、そこにあるもの自体をただ鑑賞するという動きに共感するわけです。もちろん護立が日本で初めてそういう動きをしたわけではないんですけども、鑑賞陶器という気持ちの上での運動を護立は一緒にやっていったと思います。

司会 ありがとうございます。そうすると、つまり20世紀以降、文物も流れるし、さらにヨーロッパ人の思考、例えばお墓から出てきたものを気にしないとかいう、そういうヨーロッパ人の感覚も日本人に備えられてきた。つまり文物と感覚との両方が備わってきて、鑑賞陶磁という感覚のもとに細川さんのコレクションが集められたということでしょうか。

三宅 はい。図式的と言われてしまうかもしれませんが、そういうふうに思います。つまりヨーロッパ的な文脈が、東洋の、あるいは日本の、あるいは中国のもとからあった文脈を覆っていくように思います。

司会 ありがとうございます。

今の話と似ていると言っているのかどうか微妙なんですけれども、今回の斯波先生のご講演の中で、教えていただいた1つに、西洋の歴史学の方法論を日本史あるいは東洋史に当てはめる。決してリースは日本史の先生でもなければ東洋史の先生というわけでもなかったんだと思うんですけども、東西交渉史とか、あるいは、世界史のようなものを専門に日本の若い学生たちに教えたということだったと思います。そういう方法論あるいは考え方、思想みたいなものを伝授して、リースと全く同じ学問でない、いろいろなものに応用できるようにしたのではないかと考えますが、そのような理解でよろしいでしょうか。

リースの門下にはたくさんの西洋史もいれば東洋史もありますし、日本史や南方史など、本当に多岐にわたっている学者を輩出していますが、リースからは方法論という基本的な部分を教えられたのかなというふうに思うんですけども。

斯波 その通りだと思います。欧米の東洋学者が日本の業績を評価している要点をみると、世界共通の方法論、史料学に沿って緻密に知識を提供しているので信頼できる、ということです。今から見ると、リース門下の第1世代、第2世代はこの点では意気軒昂としたところがありまして、世界史的な視野と細かい実証がマッチしていたようです。桑原隲蔵氏などもその1人です。また後の西洋史の村川堅太郎氏、南方史の村上直次郎氏、国史の黒板勝美氏などは、リース氏のセミナーで平戸の日葡交渉、日蘭交渉をともに調べていたことがあります。東洋史学科が1907～10年に出来て、さらに講座制度がはじまって、講座の数が最近までに3倍ぐらいに多くなる間に、自分の分野以外の本にはめったに目を通さない風潮が次第に生まれてきています。これは日本だけではないのですが、時々、原点に帰って何をもともとやりたかったのかという初心を見直すことも必要です。

司会 何をやりたかったかということをもまず考えるということ、ですね。

古い時代の東洋学の歩み、今回の3館連携の試みというのは昭和前半ぐらいまでのことについて注目してまいりましたが、この先将来の東洋学の歩みというのがどのようにいくのかという点が会場の皆様もご興味があるのではないかと思います。今斯波先生がおっしゃってくださったようにいろいろ多角的に考

えるのがいいのではないかと。それが図らずも明治以後、1880年代のリースが行っていたというお話だと思いますけれども、この先の東洋学の歩みの未来をどのように考えたらよいか、お一人お一人パネリストの先生方に伺いたいと思います。

牧野 ただ今、斯波文庫長からいみじくもお話がありましたように、専門は細分化することによって内容がそれだけ高度になりますので、例えばどこかの外部の団体、具体的に言うと文科省の科学研究費とかそういったところからは助成金が出やすくなるんですね。ただし、東洋学者の間でも一部の人にしかその内容はわからないし、一般の方々にとってはなおのこと、何でそれが重要なのか、どこがおもしろいのかというのは、さっぱりわからない。結局のところ最近はそのような明らかな反応が乏しくなっているものですから、助成金を与える側もより親しみやすい、ロジックがわかりやすいような研究計画を出す研究者のほうに、より多くの配分をするようになりつつあるようです。

先ほどの三宅さんのお話をうかがって、なるほど感心したのですが、細川護立は蒐集において余り実用性を重視していない。「美しいから集めた」のだと。その感性は非常に大切だと思います。東洋学の諸分野についても、「おもしろい」から研究するというのが正しいのではないのでしょうか。食いぶちを稼ぐためにやるというのは不純で、結局は自分の首を絞めてしまうことになります。

実際、東洋学は昭和初期あたりまでは東洋文庫も創設され、若い息吹もあって、とてもムードがよかったと思うのです。ところが、やはり実学に傾くというか、「役に立つ」学

問を志向するようになると、途端につまらなくなり、皆さんご存じのようなことになってしまったわけです。東洋学は非常に地味な学問です。iPS細胞みたいにノーベル賞を狙えるわけでもありません。誰にでもアクセスしやすく、夢とロマンを与え続けられる学問ということで本来的な立ち位置は良いのではと思います。そういう場を、私たちとしては例えばミュージアムや、最近始めたアカデミアにて皆様に提供してゆきたいと思います。

三宅 私は後回しにさせていただいてもいいんですけどね。これは難しい話で、ただ、情熱を持って挑んでいる人がいないと、それはなかなか維持はされないだろうなと思います。それから、私のこれまでの少ない勉強・研究の中で言えば、やはり大きい視点を持ちなさいというのはよく言われます。狭いことだけをやるのではなくて、例えば私はもともとは狩野派の絵画をやっているところから出発しました。皆さんお手元に発表者略歴があると思いますが、博士論文は狩野光信という人でした。でも、聞いたことがない狩野某などというものではなくて、「狩野永徳であるとか狩野探幽であるとか、そういう大きく影響力を持った人を研究するといいいよ。そして、それがおもしろいことになるんだよ」なんていうことを昔教わったというか指導されたことがあります。

確かに蝸壺になってはいけないと思います。ただ、むやみやたらに大きくなってしまっても困るなと思います。気宇壮大なのはいいんですけども、実証的でないとか、あるいは、人の研究をうまく貼り継いでいってではよくないだろうなと。もし後輩などがそれをやるならば、ちゃんと文書を読もう、ちゃんと絵

を見ようなどというふうに私は言うと思えますので、適度なバランスを持った上で、自分の基盤となる研究領域があって、そこから出発して、組み立てていって、その点の部分がほかの点につながって線になって広がっていったときに、私は勉強というか学問のおもしろさを覚えるものですので、東洋史、東洋美術、東洋学というのはそういったところがあるのではないかなというふうに思います。

村松 私は歴史、中国古代史を研究しておりますが、最近近代における中国の文物の流出ということに興味を持っています。そういう中で、報告の中でも申しましたけれども、中国の現在の愛国主義教育の政策と流出文物の返還問題が連動するんですね。ペンシルヴァニア大学の博物館にあります六駿と呼ばれる馬のレリーフ。それをほかの文物より先にまず返還しろという要求をアメリカに対しておこなっています。これは中国史の研究者が率先しておこなう。その背景にあるのは愛国主義なんですね。ところが、アメリカの現地博物館のアーカイブではその受け入れの経緯に関する史料をきちっと公開してしまして、それらを見ますと、中国国内で流布されているアメリカの大学の研究者が西安にやってきて略奪したというようなものではないことがわかります。どうも中国の西安の役人から袁世凱の元に流れ、その袁世凱政府が崩壊して、C.T.ルーの手元に渡り、米国にもたらされて、その後ルーからペンシルヴァニア大学博物館が購入したようです。そういうふうに、きちっと冷静に史料に従って経緯を復元していけば、あれ返せ、これ返せということにはならないんだと思います。

文物や古籍という歴史資料は、特定のひと

つの国家の歴史を構成する要素としてあるのではなくて、それがどこで作られ、どのような経緯で、今、存在するのかをひとつひとつ丁寧に見てゆく必要がある。今回の展示で言えば、現在、学習院が所蔵するものであれば、それらがどのような経緯で学習院へと至ったのかをひとつひとつ調査する必要がある。きちっと調べていけば、そのほとんどは購入したもので、学習院の教員が大陸や朝鮮半島から直接もってきたものではないことがわかると思います。その根拠となる史料を我々は図書館の原簿や旧制学習院歴史地理標本室の原簿などできちっと見られるわけです。東洋文庫の所蔵する古籍も日本のものだけではないわけで、いろいろなところから集めたものです。将来に向けて最も大事なことは、文物や古籍が一つの国の歴史を語るためのものではないという考え方です。一つの国だけにモノを置いておくんじゃなくて、やはりアジア、東洋という枠組みのなかで文物を所蔵することです。一国の例えば日本のだけ、中国だけ、朝鮮だけというのではなくて、東洋という枠組みの中で、より大きな視野から見ていく必要があるし、東洋の学問というものもきちっと考えてみるのが重要です。一方で、最近グローバルヒストリーという枠組みの設定もなされていますが、やはり東洋には東洋の特色といいますか、そういうものがあると思います。そういった意味でも地域としての東洋というものの研究を東洋の人たちみんなが協力してやっていくということが、恐らく東洋学というものを再構築していく道なのだろうと思います。文物の移動の問題は、すべてのものが戦前の日本の侵略と略奪と関係するのではないかと見られがちですが、き

ちんと根拠となる資料を見ていけば、必ずしも全てがそうではないんですね。そういった調査を丁寧に冷静におこなっていくというのが、やはり21世紀の東洋学構築の礎となる研究なのかなというふうに思います。それはアジアの人だけでなく、世界諸国の研究者と共同でおこなうべきことなのかなと思います。

司会 ありがとうございます。お三方それぞれのご意見があったかと思いますが、共通していたのは、広い視点・大きな視点を持つべきではないか。世界的な視点の中で東洋を見る。東洋の人が協力することで今後の発展がますます望めるのではないかというようなお話だったと思います。

こんなまとめでよろしいでしょうか。ほかにパネリストの先生方から何かありましたら補足お願いいたします。

斯波 東洋文庫は、さっき牧野さんが話されたように、2009年にミュージアムを開きまして、この3館の中では一番後の新参者です。三宅先生や村松先生のお話の中で、それぞれの館の立派な所蔵品を公開するに当たって、それぞれの館が培ってこられた特色のある学者の人脈を生かして、来館される方々にとって面白いテーマを掲げて所蔵品を配列し、説明もする、という工夫をこらしておられることを具体的にうかがえました。学習院大学や永青文庫のご苦心を見習いながら、来館の方々に喜んでいただけるようなミュージアムに向けて努力を傾けたいと思います。

司会 よろしくお願ひします、先生方。

では、5時を過ぎましたので、本日のシンポジウムお開きとさせていただきます。先生方ありがとうございます。